エルレンド王国記

紅このは

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
エルレンド王国記

【Ｎコード】
Ｎ６４９６Ｑ

【作者名】
紅このは

【あらすじ】
資源、気候に恵まれ、どんな船乗りでも渡るのは不可能と言われるルース海に囲まれた島国、エルレンド王国。
他国からは楽園と謳われるエルレンド王国では、王位継承問題の真っ最中であった。
有力なのは王太子ジェウスと第二王子ハレルド。
下の四人の王子は王位に無関心で、母親の身分も低かった事から平穏な日々を満喫していた。

唯一の王女はまだ八歳であったのと同母の第三王子に守られ、やはりのびのびと過ごす。

継承争いが激化する中で、一体何人の人が気付いているのだろうか。下の四人の王子こそ、上の王子達よりも優秀な曲者であるという事に――――。

※「神々の箱庭」シリーズ第三作目。世界観が違うので一作目の「レーゼの神」や二作目の「はちみつ色の姫」を読まなくてもわかると思います。

登場人物（前書き）

その人物が初登場の時の紹介です。
随時更新予定。

登場人物

〜主人公〜

◆ユーファ・エルレンド◆十七歳
　正式名はユーリファス・ハルド・ユダ・ホーレンス・エルレンド。エルレンド王国の第三王子。青みがかった銀髪に碧眼。母親は商人の娘。

◆グレン・エルレンド◆十五歳
　正式名はグリエント・エラース・フォン・アーノイル・エルレンド。エルレンド王国の第四王子。炎のような赤髪に碧眼。母親はジェウスの母の侍女。

◆ヒュノス・エルレンド◆十一歳
　正式名はヒューノロス・サイエン・ロード・ナエーラ・エルレンド。エルレンド王国の第五王子。光輝く金髪に碧眼。母親は旅の踊り子。

◆ミレーナ・エルレンド◆八歳
　正式名はミルレーナ・ティラーダ・アン・フェリシア・エルレンド。エルレンド王国の第一王女。銀髪に碧眼。ユーファと同母。

◆ルシェル・エルレンド◆七歳
　正式名はルナシエル・ファルナ・コア・リーデンテ・エルレンド。エルレンド王国の第六王子。闇のような黒髪に碧眼。母親はシュナ族の族長の娘。黒いネコ科の耳と尾を持つ。

～関係者～

◆オルヴァ・エルレンド◆六十歳
　正式名はオルヴァイン・カルーラ・ゼフ・ヨルレンダ・エルレンド。エルレンド王国の現国王。老いによる病で臥せっている。賢王だが、女好きで有名。

◆ジェウス・エルレンド◆三十二歳
　エルレンド王国の王太子。母親はトールソン伯爵の娘。

◆ハレルド・エルレンド◆二十九歳
　エルレンド王国の第二王子。正妃の息子。

◆ジェイ◆九歳
　ルシェルの付き人。シュナ族で、銀狼の耳と尾を持つ。銀の髪に金の目。

◆ルイ◆五歳
　ジェイの妹。白兎の耳と尾を持つ。耳が良い。栗色の髪に赤い目。

◆ウォーリア◆十八歳
　イルカのシュナ族。人型の時の外見は人間と変わらない。灰色の髪と目に小麦色の肌。

◆セクレン◆二十歳
　サメのシュナ族。ウォーリアと同じく中間の姿はない。紺の髪と目に日に焼けた筋肉質な体。

◆ナイレン◆十五歳

猫のシュナ族。ルシェルの部下だが、普段は情報屋をしている。

用語（前書き）

登場人物と同じく、随時更新します。
ここに載せてほしいものがあれば遠慮なく教えてください。

用語

◆エルレンド王国◆

周りをルース海に囲まれた島国。世界の西にある。資源が豊富で気候にも恵まれている。生活の心配も他国から侵略心配もないため、問題となるのは内政や疫病ばかり。建国三百年で、元は流れ着いた海賊。

◆ルース海◆

ベテランの船乗りや航海士でも渡るのは不可能と言われる危険な海。一本だけ安全に通れる道があるが、知っているのは王族と軍の上層部、一部の商人のみ。

◆シュナ族◆

人間と獣、その中間と三つの姿を持つ種族。人間よりも身体能力や治癒能力が高く、出生率が低い。エルレンド王国ができる前から島にいた、いわば先住民。約二十年前まで奴隷扱いされていたのをオルヴァ王が解放した。

◆魔力◆

魔法を使うのに必要な力。寿命の長さは魔力に左右されるとも言われている。実際、全く魔力のない人は四十年ほどしか生きられず、過去に大魔導師と呼ばれた者は二百年生きた。また、魔石（ロアーク）を使った魔道具を使用するのにも必要。

◆輝石（クォール）◆

エルレンド王国にしかない鉱石。魔石（ロアーク）と使用方法は同じだが、魔力が無い人にも使えるという利点がある。それが可能なのは精霊の

力を込めているため。込められた分の力を使いきっても補充ですると事によって再利用できる。

◆魔石（ロアーク）◆

魔道具に使われる鉱石。照明や調理器具から武器や防具にいたるまで、様々なものに使われる。魔石（ロアーク）を媒介に魔力を注ぐ事によって作動するしくみ。魔力が無い、あるいは少ない者には使えない上に何度か使うと粉々に砕けてしまう。

◆エルレンド◆

三百年前、エルレンド王国を創った十二人の少数海賊団。ほとんどが今は無きバレンス王国出身者。古代語で“輝く者”。

プロローグ（前書き）

拙い文章ですが、よろしくお願いします。
誤字脱字、感想などは大歓迎です。

プロローグ

世界の西側に、エルレンドという島国がある。

世界で一番大きいセレント大陸の五分の一ほどもあるその王国は、想像もできないほど恵まれた、楽園のような国だと言われていた。

なぜ“言われていた”なのかというと、エルレンド王国が鎖国中と言ってもいい状況だからだ。

ベテランの船乗りでも抜けるのは不可能と名高いルース海に囲まれたエルレンド王国に近付ける者は、一人もいないだろう。

それなのにエルレンド王国の存在が知れ渡っているのは、エルレンド王国出身者がいるからだ。

彼らはどうやってかルース海を越えて来て、エルレンド王国でしか採れない貴重な物を売っては帰って行く。国と取引する事はない。

それというのも、彼らが商人達に口止めをしているからだ。「国に売るつもりは無い。売って欲しくば口をつぐめ」と。

しかしながら秘密は漏れるもので、エルレンド王国の存在は瞬く間に知られてしまった。

彼らもある程度は予想していたのか、商品の出所がバレていないので特に何も言わなかった。

◆
◇
◆

さて、そのエルレンド王国だが、他国で噂されるほど綺麗な国ではない。

確かにほとんど貿易しなくても十分すぎるほど資源や気候に恵まれているが、生活の心配がなく外敵のいない国はどうなるか。

当然、内側から腐ってゆくのである。

エルレンド王国には現在、六人の王子と一人の王女がいる。

そして、現国王オルヴァが臥せっているために継承争いの真っ最中だった。

有力なのは王太子ジェウスと第二王子ハレルドだ。

ジェウスの母親はトールソン伯爵の娘。

ハレルドの母親はカリス侯爵の娘で、正妃。

家柄としてはハレルドの方が上だが、王太子なのはジェウスだ。

他の四人の王子達は十歳以上も年が離れていて、王位にも興味がないため不参加だった。母親の身分が低いのも理由の一つだろう。

ただ一人の王女はまだ八歳であったのと、同じ血を分けた第三王子が影ながら守っていたので巻き込まれずに済んでいた。

この国で、一体何人の人が気付いていただろうか。

上の二人の王子より、下の四人の王子の方が曲者であると。

今は傍観しているからいいものの、誰か一人が動けば王冠は容易く手に入るだろう。

そしてもし、複数が動けば今以上に国が混乱するだろうという事に。

気付いた者は、何人いたのだろうか。

プロローグ（後書き）

「エルレンド王国記」は下の四人の王子と一人の王女を主人公に物語が進んで行きます。
視点変更有りですので、その辺りもご了承ください。

1話　ルシェルと調査報告（前書き）

サブタイトルには必ず誰かの名前が入ります。
その人物の視点だという事です。

1話　ルシェルと調査報告

木の上で器用に昼寝をしていたルシェルは、聞き慣れた声に目を下へ向けた。

「ルシェル様、やはりここでしたか」

そう言ったのはルシェルの付き人であり、生まれた時からの付き合いである少年。銀の髪は光を反射して美しく輝き、金の瞳は捕食者を思わすように鋭く吊り上っていた。

彼――――ジェイは普通の人間にはあるまじき事に、銀狼の耳と尾を持っている。他は人間と何ら変わらぬというのに、だ。それはルシェルにも言える事で、ルシェルの場合丸い耳と猫のような黒い尾があった。

亡きルシェルの母は、シュナ族という種族の女性だった。

シュナ族とは人間と獣、そしてその中間の姿を持つ人々だ。身体能力が人間よりも数段優れ、治癒能力も高い。出生率が低くなければ、世界を支配していてもおかしくないほど優秀な種族である。

人間は彼らを恐れ、いつしか奴隷のように扱うようになった。支配する事で自分達の方が上だと示し、安心したかったのだろう。

その制度を廃止したのが現国王、オルヴァである。

奴隷制度を廃止したと言えば聞こえは良いが、実際はシュナ族の女性――――つまりルシェルの母に一目惚れしたものの、奴隷を妃に迎えるわけにはいかないので平民の身分を与えたという訳だ。

未だにシュナ族を軽視する者は多くまともな職につく事は難しい。だが、第六王子という肩書きのあるルシェルの周囲にはシュナ族の使用人が数多くいた。むしろ人間の方が少ないくらいである。

「何か用？」

「えぇ、ウォーリアとセクレンが戻って来ましたよ」

「そう。今回も問題無し？」

「ありません。詳しい報告は本人から聞いてください」

「わかった」

三メートル以上もある木の枝から音もなく飛び降りる。

無論、ネコ科の俊敏さを備えたルシェルであるからできる芸当で、普通の七歳児なら骨折してもおかしくはない。

そもそも細い枝の上で落ちずに寝るという事自体、ジェイには真似できない技だった。

その代わり、広い敷地内を自由に歩き回るルシェルを探し出すのはイヌ科であるジェイの得意とするところだ。……そんな犬まがいの事をするのは本意ではなかったが。

危なげなく着地したルシェルの後を追って、ジェイも宮の方へ歩き出した。

◆◇◆

エルレンド王国の現国王オルヴァは政治こそまともに行ったものの、女好きで有名だった。

妃が六人というのは別段多いわけではないが、愛人の数は五十人近くいるらしい。それを裏付けるように、王の元にはひっきりなしに贈り物が届く。

娼館にもよく通っていたと言うし、全く元気な老人である。

六十歳。

全ての生き物の寿命は魔力の量によって決まる中、ほとんど魔力を持たないにしてはよくもったものだ。普通は五十が限度だろうに。

現在はベッドの中にいる父親の姿を思い浮かべながら、ルシェルは無駄に長い廊下を進んだ。

幸いと言うべきかオルヴァ王は差別意識の無い人物で、シュナ族の血を引くルシェルにも他の兄弟と同等の宮を与えられている。継承権が第六位というだけあって王城からは最も遠かったが、それもありがたいとしか思わない。面倒な貴族共の相手をするよりは、宮でのんびり過ごす方が良いに決まっているではないか。

ルシェルは王位に全く興味がないが、ただ一つ気がかりな事があった。

シュナ族の扱いについてである。

シュナ族は元々口に出すのも躊躇われるほどの扱いを受けており、今も人々の意識に根深く残っている。特に貴族連中はその傾向が強く、ジェウスかハレルドが王になった時法が変わってしまう可能性も高いのだ。

人よりも能力の高いシュナ族であるから自由になった今、おいそれと捕まるはずがない。だが、仲間意識が強いために誰か一人でも捕らえられたらまず間違いなく助けようとするだろう。

もし罠をしかけられたりしたら……数の少ないシュナ族である。絶対に大丈夫とは言い切れない。

王太子ジェウスは好戦的で、接点は少ないものの個人的に好きではない。ハレルドの方は気が弱く、簡単に貴族の言いなりになってしまうだろう。

どちらも王の器には見えなかった。

「逃げる準備でもしておくべきかな……」

あくまでも自分が王位につくという考えは浮かばないルシェルであった。

◆◇◆

自室に戻ったルシェルは、既にそこに居た青年を見て顔をしかめた。

「……どうしてここにいるの？」

いくら信用できる人物でも、主の許可もなく私室へ入るのはどうだろうか。

「まぁ、いいじゃねぇか。固い事言うなよ」

紺色の髪と目をした青年はソファの上でくつろいでいる。筋肉質

な日に焼けた肌は彼にピッタリだ。

「申し訳ありません。止められませんでした」

隣にたたずむ、灰色の長髪に同色の目の青年がため息混じりに言う。彼も小麦色の肌をしているが、細身で繊細に見える。

「かまわないよ。ウォーリアにセクレンを止められるとは思えないしね」

「全く、非常識ですよ」

ジェイも呆れた顔をした。

「それで何か変わった事は？」

「周辺の国に目立った動きはありません。輝石（クォール）の出所はまだ王家にも漏れていないようです」

「漏れてなかったとしても、知っているだろうがな」

輝石（クォール）とは、エルレンド王国でしか採れない鉱石だ。良く似たものに魔石（ロアーク）というものがある。

魔石（ロアーク）は魔道具に使われる石で、照明や調理器具から武器や防具にいたるまで、様々なものに使われる。主に動力として利用されるのだが、そのためには魔力が必要不可欠なのだ。

魔力を魔石(ロアーク)に注ぎ込む事で動かす。これが魔道具のしくみである。

輝石(クオール)も魔石(ロアーク)と全く同じ働きをするため、魔石(ロアーク)の代用品として使用する事ができる。

ただ決定的に違うのは、魔石(ロアーク)が魔力の高い人にしか使えないのに対し、輝石(クオール)は誰にでも使えるという事だ。

輝石(クオール)はあらかじめ力を込めてあるため、中に入っている力が無くならない限り使い続ける事ができる。そして、その力が無くなっても補充すればまた、再利用できるのだ。魔石(ロアーク)は何度も使えば粉々になってしまうため、輝石(クオール)の方が便利である事は言うまでもない。

そして、輝石(クオール)はエルレンド王国が独占している状況だ。また、エルレンド王国では常識である力の込め方も、他国に知られてはいない。オルヴァ王はそれに目をつけた。

危険な海流の多いルース海だが、抜け道が一本だけある。王族と軍の上層部、一部の商人のみが知っているその道を使って二ヶ月に一度船が出るようになったのは、ほんの二十年ほど前の話だ。

積み荷はエルレンド王国にしかない野菜や織物、それから輝石(クオール)。

輝石(クオール)は高価にも関わらず飛ぶように売れ、めずらしい野菜も料理人や物好きな連中が買って行った。刺繍の美しい織物も他の国では見ない独特のもので、王侯貴族が好んで買い求めた。オルヴァ王の狙い通りと言える。

だが、ルシェルはそれにより“道”が知られる事を懸念していた。

少し調べれば野菜も織物も輝石(クォール)も大陸に存在しない事は簡単にわかる。どこの国の者も消去法により、エルレンド王国のものだと思うはずだ。ならば、ルース海を抜ける道もあるという考えに至るのに時間はかからないだろうし、“道”を知った国がエルレンド王国を攻めない理由はない。

だから“道”の存在を知られるのはいいとしても、その“道”がどこなのかを知られるわけにはいかなかったのだ。

シュナ族がいたとしても、平和ボケしているエルレンド王国が他国に勝てる保証はない。

「今のところは大丈夫なのか……」

「あくまで今のところは、ですが」

「この国は武器の研究が進んでねぇ。輝石(クォール)があっても、肝心の武器が古いんじゃあ意味ねぇだろ。軍も弱体化してるしな」

セクレンの言う通り、軍の質が落ちている事は周知の事実である。黙認されているのは外敵がいないからだ。

ルシェル達は、シュナ族がこの国の人間を助ける義理はないと思っている。長年虐げられてきたのだから当然だ。故郷であるこの土地には多少の愛着があるけれども、仲間の命とは比べるまでもない。

ただ、イルカのウォーリアとサメのセクレンはともかく、陸の動

物であるルシェル達は“道”を通らなければならない。

“道”が一本しかないという事は、敵が攻めてくる前に脱出しなければならないという事。こまめに情報を集めるのはそのためだった。

「んー……まぁ、お疲れ様。また頼むよ」

「はい」

「お安いご用だ」

頷く二人を見て、ルシェルは嬉しそうに目を細めるのだった。

2話　ヒュノスの夢

第五王子ヒュノスの母は旅の踊り子だった。

もちろん一般人である以上、旅していた場所は国内のみである。

それでも、旅の話は幼いヒュノスを魅了するのに十分だった。

「いつか世界を旅する」

それが彼の夢となり、十一歳になった今でも変わらずに思っている事だ。昔と違うのは、その夢を叶えるための意志だけだった。

王位から遠いとはいえ、ヒュノスは王子。国どころか王都、いや街への出入りも自由ではない。

まずは身近なところからと城下街へ行こうとした時、すぐに捕らえられてしまった事がある。ヒュノスに限らず、王族の行動範囲は宮と王城だけなのだ、と思い知った瞬間だった。

いや、それは少し違うか。

ジェウスとハレルドは必要がない限り王都から離れる気がないらしく、ここにいるのは自分の意志なのだろう。

第三王子と第一王女はあの狸貴族を言いくるめ、避暑に出かける

事がある。一年に一度だけだが、王都から出て地方へ行っている事に違いない。

第四王子は王都から出てはいないものの、将軍の一人と親しくしていて充実した毎日を送っているそうだ。

ルシェルは年に数回、シュナ族の集落を訪れている。シュナ族の使用人がたくさんいるし自身も混血なのだからと、貴族共が嫌がる視察を押しつけられているのだ。本人は喜んで引き受けたらしい。

ちなみに、その他の視察はジェウスが行っている。

ジェウスは視察が嫌いだというし、代わってくれたらいいのにな、とヒュノスは思うのだった。

つまり、ヒュノス以外の王族は王都の外へ出たいと思っていないか、自力で出る力、もしくは口実があるのだ。

羨ましい事この上ない。

ヒュノスが見て回りたいのは国内だけでなく、ルース海の向こうにあるらしいセレント大陸もそうだった。

この国は他国との交流がない。

そのため競う相手も参考にする相手もおらず、エルレンド王国の文化が進んでいるのか劣っているのかわからなかった。

いつまでも国に閉じこもってはいられないだろうし、良いものはきちんと学ぶべきだと思う。

ルース海という壁がある事でわかる通り、エルレンド王国は建国当初から一度も貿易らしい貿易をした事がなかった。今オルヴァ王が行っているのは国同士のものでないため、商人同士の取引と考えていいだろう。

そもそも、この国の歴史は三百年前に始まった。

◆◇◆

三百年前。

それは海賊達の時代。

ヒュノス達の祖先となったのもまた、海賊であった。

彼らは十二人という少数の海賊で、ほとんどが今は無きバレンス王国出身者。エルレンド――――古代語で“輝く者”と名乗っていた。

船長の名をマークレイン・ローゼン・ルド・カリエンス。バレンス王国では名前を本当に信用できる者にしか教えないため、文献にはマークという名で登場する。後にエルレンド王国を建国し、初代の王となる者だ。

エルレンドの面々は宝の地図を手に目的地へ行く最中、他に類を見ないほどの嵐に見舞われた。その危機を救ったのがコーネリア・エウスネル・リカ・ルークエン――――コーリアという女性である。

コーリアはエルレンド王国への道を見つけた優秀な航海士だった。彼女はマークと結婚し、王妃となるが、それはまだ数年後の話だ。

現在のエルレンド王国である島へ流れ着いたエルレンド海賊団の者達は、そこでシュナ族と会った。……のだが、これは一般に知られていない事実である。シュナ族を奴隷にするにあたって不都合だったために末梢されたのだ。

オルヴァ王はこの偽られた歴史を公開し、シュナ族を奴隷から解放した。もちろん簡単にはいかなかったが、どちらかというと賢王の部類に入るオルヴァ王の事。完全とはいかないまでも認めさせ、上手く治めたのだった。

閑話休題。

そこでシュナ族とどんな話があったのか、詳しくはどこにも書かれていない。

しかしエルレンドはその島を拠点とし、その後も海賊として活動した。有名ではなかったが、稼ぎはそれなりにあったようである。

海賊業に勤しむ傍らで、彼らはシュナ族に様々な技術を伝える。

より丈夫な家の作り方、織物、農作、製鉄……。

生活水準が上がれば、統治者が必要となる。マークが王となる事に反対する者は一人もいなかった。

ヒュノスは歴史書に記されたエルレンドの冒険に目を輝かせ、自分も世界を見て回りたいと思うようになった。

王族であるため、金銀財宝に興味はない。ただ異文化に触れてみたい。

ヒュノスの中にあるのはそれだけだった。

◆◇◆

「あれ、ヒュノス」

突然声をかけられ、ヒュノスはその人物を見た。

青みがかった銀髪にヒュノスや他の兄弟と同じ青い瞳。端正な顔立ちは彼に限らず王族全員に共通する事で、原因は代々の王が美しい女性を妃に迎えた事にある。あまり外へ出ない事が窺える白い肌に細身の体は、貴族共が彼を馬鹿にする原因にもなっていた。

「ユーファ兄上」

第三王子であるユーファは、“能無し”と影で囁かれる事が多い。が、本当にその通りなのか首を傾げるところだ。

そもそも、継承権第三位以下の王族に内政面でも軍事面でも役割を全く与えていないのはその貴族共なのだ。簡単な学問と護身術だけ教えられて後は放置、なんて状況でどう活躍しろというのか。

尤も、ジェウスのように活躍しようとは思わないし、ハレルドのように言いなりになるのも御免だが。

「めずらしいな。王城に来てるなんて」

「兄上こそ」

王族である以上、兄弟間に特別な感情はない。住む宮も別だし、王城で仕事をしているわけでもないので接点がないのも大きい。あったところで周りの貴族にある事ない事吹き込まれ、ジェウスとハレルドのように対立するよう仕向けられるだろうが。

まぁ、この兄が周りに流されるとは思えない。頭の固い狸共相手に避暑へ行く許可を取り付けるくらいだ。流されるとしたらヒュノ

スの方である。

「僕は父上の様子を見に来たんです。……兄上も？」

ユーファがここへ来る理由などそれぐらいしか思いつかない。

「そうだ。今から行くのか？」

「はい」

特にどちらが誘ったわけでもないが、行き先が同じである以上一緒に行く事になった。

他愛のない話はするが、血のつながりがあるとはいえ一ヶ月に一度かそれ以下の頻度でしか会わない相手だ。社交辞令ほど固くなはいが、誰とでも話すような些細な事しか話題にのぼらなかった。

「そういえば、建国祭にスノーレンを招くらしい」

「スノーレンって、あの有名な北部出身のサーカス団ですか？」

「あぁ。二の君の御所望なんだと」

二の君というのは一の君、もとい王妃の次に位の高い妃の事だ。つまり、王太子ジェウスの母親という事になる。

我がままな所のある女性でジェウスも辟易しているようだが、母

親が生きているというだけでも羨ましい。

ヒュノスを含め、下の五人の母親は皆他界していた。現在存命の妃は二人だけである。

「二の君は相変わらずですね……彼らは今ノーラに滞在していると聞きましたよ。建国祭まで一ヶ月しかないというのに、間に合うでしょうか？」

王都からノーラへ行くと、早馬なら二週間。この国では一週間が八日で一ヶ月は四週間だが、早馬で二週間かかるのに同じだけの早さで来れるとは思えない。

「転移陣を使うらしい」

「転移陣を？……正気ですか？」

確かに、転移陣を使えば今すぐにでも来る事ができる。

しかし、使用していいのは王族と公爵だけだ。非常時には解放するが、建国祭のために旅芸人が使うのは前代未聞である。

「揉めたらしいが、二の君が押し切った。ジェウス兄上も気の毒だな」

ちなみにほとんど王城に寄り付かないヒュノス達の持つ情報は、宮を出入りする使用人達から聞いたものだ。特に女性の情報網は、情報機関顔負けだったりする。

そうこうしている内に王の私室に到着し、話はそこまでとなった。

3話　ユリウスとナイレン

「おっさん、ロコの串焼き三つ！」

青年は元気な声で言った。

年の頃は十代後半だろうか。この国では然程珍しくない銀髪だ。……というか、エルレンド王国において珍しい色などないだろう。この国の民は、そのほとんどが他国出身なのだから。

他国出身と言っても、九十九パーセントは元というのがつく。かつてシュナ族しかいなかった土地にエルレンド海賊団がやって来た後、彼らは行く先々で居場所のない人々を拾って来た。原因は大抵同じだったが所属する国は様々で、当時の国々の治安の程が窺える。

残りの一パーセントは外から偶然流れ着いた者だが、ルース海のような特殊な海流をした海では滅多にない事で、本当にごく数人だ。一パーセントより少ないかもしれない。

そんな訳で、エルレンド王国には特定の色の髪や目というものがないのだ。

……いや、一つだけあったか。

それは、青い瞳。バレンス王国の民である証だ。

初代国王であったマークやエルレンド海賊団の面々は、そのほとんどがバレンス王国出身者だった。バレンス王国は三百年前に滅びており、彼らが最後の生き残りと見ていいだろう。そして、バレンス王国の王家の証が青い瞳。書物によれば、マークはバレンス王国の王族である。

つまり、青い瞳はエルレンド王国の王族の証でもあった。

「おう、ユリウスか。久しぶりだな。ミナちゃんは元気か？」

「元気すぎて大変なくらいだ。目を離した隙に何をしでかすかわかったもんじゃない」

ユリウスは大げさにため息をついてみせた。

「ははは、相変わらずだな！それでこそミナちゃんだ」

この辺りでもユリウスの妹、ミナのお転婆な性格はよく知られている。ユリウスの苦労と、そのシスコンぶりも。

「それでこそってなぁ、こっちの身にもなってみろよ。スカートの裾をたくし上げて窓から出て行こうとするミナを必死になって止めたんだ。今日だって、土産を買って来るって約束でようやく大人しくなったんだぞ」

「そりゃあ大変だったなぁ」

「人事だと思って」

ユリウスとミナがどこかの金持ちである事は暗黙の了解である。服装や言葉使いが違うし、本人達も言わないだけで隠している様子はない。ここの人達は身分に関係なく中身を見る人ばかりなので、気にせず接していた。

「んっ、やっぱここの串焼きはうまいな！」

「そうだろう。当然だ！……おだてても何も出ねぇからな」

「チッ」

舌打ちをするユリウスに、男は苦笑した。ユリウスと妹のミナは、明らかに金持ちであるのに庶民と大差ない価値観を持っている。

それだけでなく、この店の串焼きなんて好きなだけ買えるだろうに、親からもらった金は使っていないようなのだ。だから事あるごとに値切ろうとしたり、相手を誉めそやしたりする。多少大げさに言うだけで本心だという事は顔を見ればわかるので、満更でもないのだが。

「おぉっ、ユリウスじゃねぇか。今日はミナちゃんいねぇのか？」

通りかかった別の男から声がかかって、ユリウスは眉を寄せた。

「何で会うたびにミナはって聞かれるんだ」

「ミナちゃんはここらのアイドルだからな！」

「オレの息子なんて毎日のようにミナちゃんの話ばっかり……」

「お前の息子ってタグか？……殺す」

殺気を放つユリウスに、二人は顔をひきつらせた。

「おいおい、冗談じゃねぇぞ。コイツ外見に似合わず強いんだからな」

「……すまん、タグ」

コソコソと話す二人。

ユリウスの腕っぷしは特別強いわけではないが、そこらの男を軽くあしらえる程度には優れている。戦う事が仕事の兵士達でも真ん中辺りまでなら互角に戦える腕前だ。当然、年下の男の子などに負けるはずがない。

二人はユリウスの前でこの手の話は禁句なのだと、頭にしっかり刻み込んだ。

「兄貴がそんなんじゃあ、嫁に行き遅れるぜ」

「一生オレが面倒見てやるから、問題ないな」

ユリウスのシスコンっぷりに、内心でため息をつく二人。

「あぁ、それはそうと、ナイレンが呼んでたぞ」

後から来た方の男が言う。

「ナイレン？いつものところか？」

「たぶんな。大丈夫だとは思うが、気を付けて行けよ」

「んー、了解」

◆◇◆

ユリウスは、人気のない裏路地をのんびりとした足取りで歩いていた。決して治安が良いと言う事はできないが、貧しいなりに必死に暮らしている人々の住む場所である。普段ならボロ布を敷いて寝転んでいる人をちらほら見るのだが、どこかへ出かけているのかその姿は見えなかった。ただ薄汚れて穴の開いた布があるだけだ。

「来たか、ユリウス」

「あぁ、ナイレン」

突然かけられた声にも全く動じず、ユリウスは返した。

「何か動きがあるのか？」

ユリウスは背後に立つナイレンに言った。腕の立つ情報屋として有名な彼と会うのはいつもここで、得体が知れないが信用のできる人物だ。……少なくともその情報に関しては。

「ミナに関する事ではないが……また側室が増えたらしいな。それも一度に三人」

ナイレンの言葉に、ユリウスは呆れたようにつぶやいた。

「またか。全く、兄上は何がしたいのだか」

どうやら長兄は父の女好きを継いだらしい。継承争いの最中にも側室を迎えるとは。

まぁ、妹に関係がないのならユリウスにとってどうでもいい話である。勝手に争っていてくれればいい。どちらが王になろうと知った事ではないのだ。

「で、今度はどこの誰だ？」

「それが末梢されているんだ。大方、娼婦の娘か何かなんだろう」

側室の出自が末梢されるのはめずらしい事ではない。現国王や王太子のような女好きは身分にかかわらず自分好みの娘を召すため、あまりに低い身分の娘はその出自を隠されるのだ。

「王女をどうこうしようとする動きはないんだな？」

念のために尋ねるユリウスに、ナイレンは苦笑した。

「ない。……今のところは、な」

「それならいい」

ユリウス――――いや、ユーファにとっては妹であるミレーナの身の安全が保障されるのであれば、他は二の次だ。懐から普段使う事のない無駄な金を引っ張りだすと、ナイレンに投げてよこす。

「うわ……金ばっかりだな。相変わらず」

「平和ボケした狸共がよこす金なんか使いたくはないからな。オレには不要なものだ」

袋いっぱいに入った金を不要なものと言い切るユーファは庶民に恨まれても文句は言えないのだが、その気持ちがわからなくもないナイレンは黙って受け取った。

「じゃあな、また頼む」

ひらひらと手を振って歩きだしたユーファを見て、ナイレンは再び苦笑した。

「妹を大切にするのもいいんだが、少しは自分の周りを警戒した方が……いや、あの人にとってはそれこそどうでもいい事か」

ぴょこっと飛び出したブルーグレーの長い尾をなで、三角の耳を動かしたナイレンはひとりごちる。

「さぁて、ルシェル殿下に報告か」

自分よりもはるかに高い壁を軽々と上り、小さく見えるユーファの背をもう一度眺めると、主人の宮のある方向へ屋根伝いに動き始めた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6496q/

エルレンド王国記

2011年5月24日13時32分発行